



品 3
號 323
卷 3

廿七

伊勢文

東遊記卷之三

丈氏の餘風

佐々成政越中と領せし敵よ團を執る

外小味方の助け無きハ我城と云ふ守り難し

濱松ハ幕府のちり

方以敵よ團を執る

日の中ナルハ夏は日下にも雪消ぬ越中

了者まじし教文乃雪封と云ふ身歎ふ

...



里七十里或ハ百里とも傳フ所哉 終ふ一日二日の間に
 舟なりけ介は舟の外が濱迄解船田 蓮田はしり
 も今別云る處は遠く 官中より其處に山城越えて 志を
 こころしき事こそ餘一里二里五里七里の程ちりき
 ありがくのほどく 雪の上は越くを多しあむ 亦多
 事いハ皆新附或ハ懸原ありしなりを多し
 くらねるなり 此地數十丈乃雪積りけは 藪をのり
 ありハ雪は皆積るらん 氷く甚堅くいふ 踏もた
 入らんしりなりなり 南阿比雪の積りしハ 大よ遠いしり

ものこを中よは地は極びるハ 行らん 行らん 行らん
 志祖 西京乃和秋の中くはは 経りある通るを
 雪に溜りなき山里と云へし 兼くハ 解くくくくく
 一は是等の事をとらん 守て初くは 次第威せり 後の正
 宗はも 戦國の中よ 守を 守り 守り 守り 守り 守り
 一は 雪嶺の名真く 叱咤の威 高き者なく 今よ 守り 天
 下一二の大諸侯とも 其 基 成 成 成 成 成 成 成 成 成 成
 くと 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り 守り
 一は 文武兼備 真の 傑の 大なり 守り 守り 守り 守り 守り

出づる関帝かんていの和わず世よに人ひともあつたふ之これ又また却かへて
 將軍しやうぐんの家いへに後のちに依よつて西にし京きやうも上のうへ系けい乃すなはち小こ禁きん裏り
 ぬく若わかく人ひとも立たはばいふ心こころ景けい度たの必かならず許ゆるひ人の言ことを
 一ひとつとつてふもあつたやうに思おもはれぬとあり
 一ひと時ときに家いへよりあはれあつたまふ赤あかふ月つきもあはれ
 つこの中なかにのたしあはれんと依よつて又また年とし老おい
 りる後ののちの依よつ馬うま上のうへ青あお年とし過す世よ平へい白しろ髪かみ多おほ残のこ軀み天てん
 所ところ許ゆる不ふ樂らく是こゝ如ごと何ごととさして文ぶん名なもふき大だい將しやう乃すなは
 詩うたより感かんとさしてさへいふやい餘あま風かぜ子こ孫そん小こ

依よつて吉きち村むら々々とつてえいふ依よつて亦また乃すなはち春はる言ことささる
 今の太た守しゆ尾お中ちゆう將しやう重じゆう村むら々々もわ方の望のぞえあり去年こぞとせの
 中ちゆう秋しゆう東とう武ぶ々々の依よつて了しま車くるま逢あつたりあはれ世よの塵ちゆう
 一ひと時ときに河かのさき山やまの邊へにともなふも軒のり冕えん計けい
 ありやう、人ひととありなりい中ちゆうにさしてあはれくさる
 一ひと時ときに先ま祖そ西にし京きやう々々文ぶん武ぶ乃すなはち大だい將しやうよりいへ
 存ぞんせらうといふ一ひと

西木にしき叔しゆく休きゆう

西にし京きやうの進しんといふは美み濃のうふ大だい垣げんの家いへ中ちゆうより
 一ひと時ときに

の武士ぶしかりけ人にん教しやう術じゆつの妙たぎと得とくずけ門かど人にんとある者ものは
 損こと授まうとくし系けい部ぶ振ふりも此こゝ損こと傳でん授じゆしる人にん
 多おほくそ外が江え戸こ振ふるを多おほく語かたべし門かど系けい後ご
 け段だん進しん教しやう術じゆつの中なは付つくま世よ間ま多おほくの身み妙たぎの
 心こゝろ多おほくし信しんしうしやうこゝろあるは族しやく中ちゆう
 て彼かの門かど人にんは親ま親ま交か交かすて修しゆ行ぎやうはあしとせし
 小せう威い十じゆぶくたふしむきま之の辰しん進しんの父ちち祖そ
 小せう有ゆう乞き如に年ねんより教しやう術じゆつを公こうと名なせ日にち夜や寢しん食じき
 とりとれて修しゆ行ぎやうせし一いつ夜や寢しん間まの復ふと鼠ねずみの咬かき



此の
 貞

公事よあつては、（さうして）さうなるに血をよそひて夜もあつた
 らば、（さうして）世を敷く乃條目ありて去し、（さうして）是よりつてもむくこ
 とあるハ摩利支尊天の御討とせりて武運（ついで）
 とて初めよかくのてしとて思ふなり、（さうして）け辭よむむく
 者いそし人強兵條不持とていへどもそを去るなく
 損乃身特とてふと定めりて謀にむくのてしとてあむむ
 正大乃相約とておむき損あり聖人の道とていへどもけ
 とや育つて實よ瓦通乃奥美とていへども法華經の水
 火も焼溺とてさうありて説き老子は虎豹も牙と

觸るる子なりと教へしは亦是よ外なるに鎖束の杖を
 のてしとて其妙よまむりてハ有義きて多しとていへども余
 そ人よまむりて親とていへどもさうありてハ強とていへども
 まもあつてまもや

丹後の人

奥州津輕の外に演よ在りしは亦の役人より丹後
 の人よそむとて頻りにいへどもさうありてハ強とていへども
 思ふに津輕の志保山乃神よ丹後の人哉
 思ふに丹後の人哉

号^{ごう}おても^{いさむく}凄く^{いさむく}お^いま^ま多く^おハ丹後^{たんご}人^{ひと}は長^{なが}く^く遠^{とほ}く^く出^いま^ま幸^{さい}に
かむ^かり^り人^{ひと}乃^{すなは}恨^{うらみ}ハ^は深^{ふか}き^きもの^{もの}也^{なり}

幸^{さい}の神^{かみ}

てハ^ての^のふ^ふあ^あら^らく^く出^い羽^は國^{くに}控^かえ^えの^の深^{ふか}き^きあ^あり^りの^の街^{まち}道^{みち}の^のあ^あら^らふ^ふよ^よ名^なの^の深^{ふか}き^きを^を
示^しめ^める^る祭^{まつり}に^にも^もか^かく^く必^{かなら}ず^ずの^の岩^{いわ}小^こ名^な免^{めん}纏^{ぢん}と^と張^はり^り其^{その}
志^{こころ}の^の繩^{なは}の^のと^とに^にな^なる^る細^こ工^{こう}の^の陰^{いん}董^{どう}の^の形^{かたち}と^と作^{つく}る^る道^{みち}の^の
方^{かた}ハ^はむ^むけ^けく^く出^いり^りあ^あり^りそ^そ陰^{いん}董^{どう}と^とな^なり^りして^{して}長^{なが}七^{しち}八^{はち}人^{にん}
む^むら^らゆ^ゆ命^{いのち}と^とな^なり^り又^{また}周^{しゅう}へ^へも^もあ^あり^りあ^あら^らの^のけ^けし^しの^のか^から^らぬ^ぬ
もの^{もの}あ^あり^りの^の人^{ひと}は^は多^{おほ}く^くも^もあ^あり^りそ^そハ^は毛^けを^を付^つけ^ける^る人^{ひと}は^は少^{すく}く^くな^なり^り也^{なり}

幸^{さい}に^にく^くま^まの^の神^{かみ}と^と名^なを^をけ^ける^る毎^{まい}年^{ねん}正^{せい}月^{げつ}十^{じゅう}五^ご日^{にち}お^お祭^{まつり}を^を
修^{しゆ}む^むと^とな^なり^り正^{せい}に^に神^{かみ}乃^{すなは}ち^ち幸^{さい}に^にあ^あり^り中^{なかつ}に^に祭^{まつり}を^をお^おす^す
ハ^は廿^{にじゅう}六^{ろく}と^とい^いふ^ふ御^{おん}巡^{めぐ}見^み使^し又^{また}ハ^は御^{おん}目^め附^つホ^ほは^は通^{とほ}り^りの^の名^な
も^も祭^{まつり}に^にく^くま^まの^の若^{わか}き^きもの^{もの}、^{たの}戯^{たがひ}を^をお^おす^すに^にあ^あり^り也^{なり}と^とい^いふ^ふ
ま^まは^は免^{めん}纏^{ぢん}と^と紙^{かみ}と^と張^はり^りく^く多^{おほ}く^く付^つけ^ける^る是^{こゝ}ハ^はい^いふ^ふ事^{こと}也^{なり}
所^{ところ}と^とい^いふ^ふ名^なを^をけ^ける^る女^{にょ}と^とい^いふ^ふ男^{おとこ}を^をお^おす^すに^にあ^あり^り也^{なり}
ま^まは^は免^{めん}纏^{ぢん}と^と紙^{かみ}と^と張^はり^りく^く多^{おほ}く^く付^つけ^ける^る是^{こゝ}ハ^はい^いふ^ふ事^{こと}也^{なり}
京^{きやう}邦^{ぱう}の^の今^{いま}も^も出^い川^{がわ}の^のと^とよ^よの^の祭^{まつり}の^の名^なの^の神^{かみ}と^とい^いふ^ふ事^{こと}也^{なり}
る^る神^{かみ}と^とい^いふ^ふ名^なを^をけ^ける^る田^{でん}舎^{しゃ}と^とい^いふ^ふ名^なの^の神^{かみ}と^とい^いふ^ふ事^{こと}也^{なり}

あまきども陰莖乃形の石陰門の取の石と神體と
了所の氏神杯よけひありてたふとひがしつて不
多し日本は古風な神代の巻にの所感者令
の古事杯ゆきくしひけふる事多し神道乃
祕事よきかふる事多しと我おふ

屋氣樓

唐玉乃詩文も多しゆきくしひけふる事多し
ゆきとあり又海市ともふ海とよ事おぼくしる五
のうりく樓屋城廓の形とありはし生中の人馬

原海画成



付集せるすももまたあつらんらん之屋土乃書物とい
 つるとは大海乃屋土ある大なる蛤吐き吐く空中
 小樓閣乃くちらとめりすくと又屋土乃其歌詩
 のくたりのめく海中に住く氣を吐く樓土は結
 ふかりと名づくの説あつ蘇東披披も南海に掛い
 時飛神の祈りて屋氣樓と見詩とけりしとあり
 屋土のくちらとめりすくと又屋土乃其歌詩
 四乃乃大海の何れは土乃人七海とんる者もかりあり
 け屋氣樓は星稀之只越中乃魚津とつふふよ毎年之

月の末の日月の同は天を神小のどやうして風物
 海と雲海の一而乃鏡のち早ききるごとく死日よは
 屋土氣樓とむもぶ毎年一と夜或は多き年とて四
 も海の中あり津に屋土乃人のいづくは土乃土
 づく屋土づくくちらとめりすくと又屋土乃其歌詩
 しく武の城舞はやく人馬は来りてて屋土乃其歌詩
 しく屋土乃其歌詩と我親しく交りて屋土乃其歌詩
 しく屋土乃其歌詩と魚はよく生かんと初は幕とり
 が下りくからしとまづくくんと同小城舞はよく交

一と記余初見唐人乃佐藤詩抄と云く思ひ
を屋樓大洋とある事平くして陸地を北入海
少るがきこつてその中に魚津の地理と云
に在るをありて魚津は北海小島と云ふ
の方七八里と云ふ程は能登國乃山城屏風の
よる魚津の海は東より入海あり海中より
陽氣向山の山は映して雲の形と云ふ向ふ
小島は数百ありて大島を以て陽
氣の向くと云ふも今亦の島を以て映す

一と人の月見えと云く小作船の舟若乃
海も二十五年の内をさき多く屋樓と云ふ
事ありといふ事らも向ふは尾張之河の山と云
ありて名かきと云く又安藝國と云くはさりと云
はるも向ふは山々のなかれはさりと云く屋氣樓と云ふ
事いまだきりて事と毎ひ人きと日月の光越中に
たびく世樓基は云ふ事と云く也
佐藤と云く
我が旅の付をいつるも五戒と云く道中記

の初よ大なる事行けし毎日は成りてく時く時
かり其五戒と云ハ流海馮河夜行異食賤妓之
此皆穢り乃人の最身とあやまし
めし志ある人々懼るまじし
今くし長々と時くし中葉を樹と成然
て人成極い後世を憂むし
事七葉くまよく公けし
時は時くはし天子御
知も知り川越しし

を是年の川何経の事ありしと云ひ途の探
会せし人は日をもてしる成りし人の他を
志とせん事と記れ事よかりしを
ぬあもと著とし一夜と契るか
る女も一夜と契るか
くも果くれの外方るし
は中記はか
かりしも侵ししに熱後
江津のりりしも二月八日ありなり

東洋書院

の諸般をなすへるよ入りの見は然中より新者ま
 一松軒とふ人け居より松倉と遊軍して居る
 是は舟旅中れ遊進かたぐさしそ赤神ふと松
 舟まぐさ世町より左邊に渡る船ありよき便船
 かなむばぐつろい渡る之やこも佐渡へ一息しおじ
 ろんやよき道達あせばあしくは佐渡へ多所探
 んとすもむくそ天氣晴なり風を静く又かくよき
 便船とま向しりたが舟出ると半あふいとや佐城
 之より遊軍しく風土よとアとの松と側り不るゆり

出く何かあくるまゝるるゆり船よまありお練るお舟に
 人まゝり空しくりそ松軒と後余味をのりかるとの
 外に荷物お積入くいと小き船なりお小北海に
 いらまにあり浪風荒く海とよ船の性外ありやしく
 12月初出よとよ船とよと半へはは天氣お静き
 長雨あしはとていまど之月の上旬なりは初て佐渡へ渡
 らしくまゝの船と是も諸方ともいまど佐渡へ渡りし船
 ちまされあしは内よ荷物と積海とに松の利よと海
 る舟よ危きを侵しく渡るとお板初更さるは隣と

出しよ年老し船頭一人送りゆき、船中にもあるべきに
 ちねハ北乃やま雲少し入り又月の色も待せ候はる小
 此程天気より候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 半の海へ北ふする中、初きおハ中途よりあまのつら
 も北と云へし佐渡山をくかりても風起しハ佐渡は舟
 半折ふし北浪は吹散るる若き者元氣よとや
 月しあやまらるる候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 氣味よき事よりのふりかへしあまのつらゆゆゆゆゆゆゆ
 せく山海はめ里う程ゆるふよ北の方の雲と天と接せ

一あやまらるる候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 あやまらるる候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 ちねハ北乃やま雲少し入り又月の色も待せ候はる小
 此程天気より候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 半の海へ北ふする中、初きおハ中途よりあまのつら
 も北と云へし佐渡山をくかりても風起しハ佐渡は舟
 半折ふし北浪は吹散るる若き者元氣よとや
 月しあやまらるる候はるしゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 氣味よき事よりのふりかへしあまのつらゆゆゆゆゆゆゆ
 せく山海はめ里う程ゆるふよ北の方の雲と天と接せ

おもせよお成陸より舟にのりていふはあつちをさるるまきよ
おーといひく船頭へお成あやううさくく又お成
くもあまの海にさるる風つらくあまの海にさるる
忽ちよ覆らんものよとあまの海にさるるさるるさるる
さるるもさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
成多のあまの海にさるるさるるさるるさるるさるるさるる
はるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

お成の肝に刻みお成の心はいつるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あまの海にさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
諸の心はさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
天に真の助ありさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
の心はさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

る小ねよふらふまゝに去浅き小限りちりしを北海に
浮るけ天氣よ遠いしふ思ふてしるの浅くぬる
るあるち不思議の事しるもふしし。まふ下北帯あり
の佐渡より人の浅くハ中時よりふふ浅方一とんち
中時佐渡よりほり口の町ありハ繁華地なり海
上も船とく船は十八里と隔たり又出舟時より四
里東北に寺泊りしとふあり世も頗る繁華の地
なりハ寺泊りち佐渡(一)よふき地より十六里の海
上へはと海むしハ佐渡の海りは浅く寺泊り之きむら

一高兼大納言佐渡小(配流)の村世寺泊りハ澤し
了敷日風成又人々そそ遠年一移ひりり附け里の旋
女初君とふとれ知りたりしに初君別とて怪し
し、和舟ししむしおたり今に町の中経及も側は石
碑に彫りしおしり碑面と見えハおとし越流の末乃
白波も之ゆる日れ有しとておまけ柱女初君とありと
ち高兼の公はかきとてありしを後しれたるも
限るちやくやくしきしとてはしし後とて玉中集りも
入るししかりとかり又日蓮上人佐渡を爲配流の時

此寺泊るる七日間風候待多しなるに其推し海
の寺も出まら減ふ越後小島とむいりより鬼行
といひかゝるる一哉等とて此岸水乃身たおもむ
へ寺圓といかりいもいづるに鳥貴の身とて越
後小島とてい海と隔てたる佐渡の島と左遷りか
かり内いりあし初君とち成るるにけしちを討の
おのいやくとて後と後と後と後と後と後と後と

東遊記卷之三終

